

尊敬と崇拜とは別なり

第八章 人種學上宇和島の提供する無類の材料

七三六

なり。若し宇和島而も伊達家の小忠臣が、自藩以外の他國人民より崇敬せらるゝ如きを見るも、此神社の伊達家の忠臣を祭れるに非ざるを察するに足る。

素より忠義と謂はゞ大小を問はず之を尊敬すべしと雖、尊敬と崇拜は自性質を異にす。山家傳説の如き忠義は天下掃き棄つる程數多之れあり、決して崇拜を起すべき性質のものに非ず。若し夫れ山家公の亡靈が、妖怪變化の所行あり、敵人に崇りしと謂ふが如きに至つては、寧ろこれ神の徳性としての下等なるを示めすものなり。其妖怪變化の眞否の如きは識者の問題とはならざるなり。吾人は此くの如きものに對して崇拜の念を起さず、明かに是れ後人の偽作譚たるを知る。

殊に山家氏の母及び妻は、出羽の羽黒山に後難を避けたりとの傳説あるが如き—南豫の宇和島と北國出羽との地理的隔絶は—愈々以つて此事の宇和島の出來事に非るを示めすものにあらずや。

其等の事は餘に郷土的に偏するが故に、こゝには多く言はざるべし。宜

崇敬の性質研究

神生れと人生れと二種の神と崇敬の性質を異にす

菅公は天神に非ず

第八章 人種學上宇和島の提供する無類の材料

七三七

く和靈神社の人民一般より受け玉ふ所の崇敬の性質を見るべし、決して忠義云々の觀念に對するものに非ずして、極めて廣汎なる神徳、寧ろ商業航海強力の觀念に對する崇敬なるを見る。

元來祭神には二種あるものにして、一は神生れの神なり他は人間より成り上れる神なり。人間生れの神即有功なる人物を祭れるものは、其神如何に偉大絶倫の人物たりしとするも、決して始めより神に生れて神となれる神々の有し給ふ如き宗教的大崇敬を集め得べきものに非ざるは、研究者の注意すべき事となす。されば補公たれ義貞たれ、人間より成り上れる神々は如何にするとも宗教的崇拜は得ること能はず。かの菅公の如き天神なりとして祭られ、宗教的信仰を受け給ふが如き觀あるも、天神宮は歴史的人物たる菅公を祭れるに非ずして、實は雷霆の神たるゼウス(伊邪那岐命傳記に小説を加へ、之れに菅公傳を附會したるものにして、菅公の大崇敬を有せる如きは、實は歴史上の菅公に非ずして大神ゼウスなり—天神宮は菅原道眞を祭れるものに非ず。祭神研究法には此邊の着眼なかる可からず。

「和靈」の語原

神事研究—御田植

祭禮の手鬼

第八章 人種學上宇和島の提供する無類の材料

七三八

余は前述ツル島と鶴島との關係より考へ、又たヘラクレスの神は大倉主神たり、宇和島の御倉の和靈神社あるを考へ、ヘラクレス(メルカルト)は御倉の神、和靈の神たるを想はずんばあらざるなり。(現在藤江或は鎌江の和靈社亦御倉の夫れと同一の神)且つヘラクレスは強力無雙の神にして、羅典語「強力」を「ワレイ」(Valei)と謂ふ。ヘルメース(メルキュリ)亦「強力」を崇拜せらる、之れ亦「ワレイ」なり。此「ワレイ」は「和靈」にあらすして何ぞや。從來の論者果して和靈の意義を解き得し者あるか。

此神社の祭禮に御田植なるものあり、是れ羅馬に於けるヘラクレスが一面又農業の神として祭らるゝを示めせる如し。

凡て祭禮の神事は祭神の性質を表はすものなり。和靈神社の神事中果して何等傳説の山家氏に關するものあるか。全然之れ無し。却つて牛鬼即ち「ブーヤレ」の出しものあるを見る。是れ希臘の赤牛神話に基づくものにして、余の以つて和靈社なりと爲す所のヘラクレスの神事にはあらざるか。マーキュリ神にも亦是れと同様の神事ありて、兩神相混同せり。意

隨神門の大羅針盤
是れ通商航海の神

繪馬の研究

第八章 人種學上宇和島の提供する無類の材料

七三九

ふに前記牛鬼の神事は専ら和靈神社のものたり、「デンデコ」は三島神社のものたり、「ヨイサ」鬼の首、布袋等は宇和津彦神社のものたりしも、何時しか變遷及共通を生じ、何れの祭禮にも大抵同様なる出し物あるに至り、牛鬼の如きも和靈神社の專屬とならざるに至りし者ならんか。「カブ」なる獅子舞あるはこれ埃及起原のものなるを示めり、或はヘラクレスの神事ならん。

其最も顯著なるものは、此神社の隨神門の天井の大羅針盤なりとす。傳説の山家公頼何ぞ磁針に縁あらん。是れ此祭神の通商航海の神たるを示めす所の有力なる證據なりと謂ふべし。かのヘラクレスの神も、メルカルト(或はマーキュリ)同一も交通、巡回、及び航海の神にして、殊にメルカルトの名を以つて祭れる神は港灣及び海上の神たるなり。此に於て余の議論の羅針盤は其指針を誤らざりしを感ず。

且つ之に關聯して、其繪馬殿に献納せる繪書を見よ、多くはこれ通商航海に關するものにして、難船に助かりし感謝を表し、海上の安全を祈るものなり。又た此神社の發行する御札は、商人、船員、多く之を受け、或は船中の神壇

第二編

「ヤンベ・キミヨリ」の名稱研究

不當の崇敬

に奉置するを見る。凡て是等を綜合するも、此祭神の傳説に謂へるが如き伊達家の一臣たり、又た人間たりし山家公頼なる者に非るを知るなり。

余は時に謂へらく、此神名ヤンベ・キミヨリとは或は太古のマーキユリー神の別名にして、希臘語「乗船航海のキムメリ人種」を意味せる所の *Ἀντίβη Κίβη* の「アンベ」は「ヤムベ」(山家)となり、キンメリオイの「キミヨリ」公頼となりしには非ざるかと。何となれば宇和島は前述の如く航海のキンメリ人種關係の諸言語歌謠名稱等甚だ多ければなり。若し或は然らずとせば、菅公がゼウスなる天神に附會せられし例を考へ、史上の實在人間たりし山家公頼なる者が、ヘラクレースの神に附會せられて不當の祭禮及び崇敬を受け居るものゝ如し。而して伊達家に於ては山家公頼なるものに就て何等の記録なく、又た關係を認められずと聞く。當より其所なり。或はこれと靈神境に合祀せられ居たる伊達家の一臣が、長久の年月間に其正殿の大神と混同せられてたるは不可能の事に非ず、軒下より本屋を奪ふ例之れあればなり。

言語の比較

山家を別に祭れ

和靈神は高貴なり

「和靈」は「羅馬」なり

要するにヤンベ(山家)は之を別問題と爲すも、和靈(Vale)神は伊達家の一臣に非ずして世界的の大神たるなり。宇和島人若し人間たる山家公頼を祭らんと欲せば別に之を忠臣として祭るも可なり。不當の崇敬を不當の神に拂ふは正當の神に對して不敬なり。和靈神社若し余の言へるが如く、ヘラクレース或はヘルメースなりとせば是れ世界太古の大神なり、郷村の神たるべきに非ずして格位高貴の神なり。單に宇和島人のみに止らず、廣く世界一般の崇敬を捧ぐべき神なり。(此神は鹽釜神社と同一神なり。故に和靈社は鎌江の釜神社境内にありしと言ひ傳ふ。大阪の御靈神社、神佛混合にては摩利支天と同一の神なり又國常立神なり)

尙ほ一事附記せざる可からざるは、和靈(Vale)の「強力」權力等を意味する羅典語なるは前述の如しと、雖若し之を希臘語もて表はす時は「羅馬」(Roma) Ⅱ *Pōnia* となることにして、即ち—

和靈(Vale)〔羅典語〕
 羅馬(Pōnia)〔希臘語〕
 Ⅱ 強力、權力

たるなり。されば古來 *Valentia* (和靈なる名稱は羅馬の別名として稱呼されしなり。

茲に於て余は前述の諸記事を材料として考ふるに、

宇和島は (トロイ(三島關係に於て) ツル(鶴島城關係に於て) ローマ(和靈關係に於て))

たらんことを理想せしもの、如く、日本植民史研究上無量の興味存せりと謂ふ可し。

又意へらく東亞の馬來半島は、或は、*ウ*音の、*マ*音に變化したるものにして和靈半島の轉訛にはあらざるかと。是れ、有り得ざる事に非ず。

十四 スカンデナビアのトール、オー
ジン、ジンゴー神と極東日本の
豊浦、應神、神功諸天皇

(十四)スカン
デナビアの
トール、オー
ジン、ジンゴ
ー神と極東
日本の豊浦
應神、神功

較 比 の 語 彙

彼我の神々	日本の三帝	スカンデナビア の三神	其對比
吾人は、デンデゴ歌に由りて極東と歐羅巴極北との歴史地理の連絡を得たり。茲に余は此機を利用して古代スカンデナビア人の尊崇せる神々と、極東日本が今日に至るまでも尊崇せる神々との連絡あるを證明すべし。仲哀天皇は之を豊浦の宮と稱して不可なるべし、其後は神功皇后、其太子は應神天皇にして又た弓八幡の神と申す。是等三神は我皇室の祖先中の偉大なる尙武強力の諸天皇にして、又た吾人の尊崇する所なり。こゝに吾人は眼を轉じてスカンデナビア諸國民の尊崇せる所の神々を研究せば、彼等にはトール、オージン、及びジンゴー (Thor, Odin, Jingo) の諸神ありて、是等は皆尙武強力の男神たり女神たるを知る者なり。請ふ試みに前記日本の三天皇と、スカンデナビア人の、三大神との發音とを比較せよ。	(日 本)	(スカンデナビア)	トヨラ(豊浦宮).....トールの神 ジンゴー(神功).....ジンゴーの神 オージン(應神).....オージンの神

にして今之を羅馬字もて綴るときは、其綴字形は全然一致するなり。

{Thora [J]—トヨラ(豊浦)

{Thor [Se]—トール

{Jingo [J]—ジンゴ(神功)

{Jingo [Se]—ジンゴン

{Odin [J]—オージン(應神)

{Odin [Se]—オージン

此の如き見事なる一致の形状を呈す。殊に「ジンゴ」なる名稱に就ては、西洋方面の説明に據れば「神」或は「至高の神」を意味せりと爲す。これ我支那字に神功の「神」字を用ゐ居ると一致せるものにあらずや。且つ吾人が此女帝を稱して「ジンゴ」を「神功皇后」と謂居るに對しては、西洋にては之を「ジャンゴイコー」(Jangoikoa)と稱す。亦是れ同一たるなり。即ち之を綴字形に示めす時は

ジンゴイコー……………Jingkoogoo [J]

「神功と
「ジンゴ」

應神と八幡とヤ
ヘテ

スカンデナヴィア
の應神船と日本
の八幡船

ジャンゴイコー……………Jangoikoa [Se]

の對比を生ずるなり。此女神は西洋に在つても尙武一寧ろ好戦女神として傳はり、好戦的傾向を稱して Jangoism 即ち神功主義即ち「好戦主義」と謂ふなり。

應神天皇は又た弓八幡と稱すし又た八幡様とも稱す。之れ希臘語「弓術者」を意味せる所の Japheth の「ヤハタ」となりしものにして舊約書に在つてはアリアン人の大祖先ヤベテ (Japhet) に當るものと爲す。日本人が到る所に八幡神を祭祀せるは故なきに非ざるなり。著者たる余の如きも現に八幡神を以つて氏神と爲す。

是等三神の系圖に就ては、彼我多少異れりと雖、此三神は皆夫婦子の關係にあるものなるは又た彼我相一致せるなり。尙ほ此事に就ては後編神功皇后の章に論ずる所あるべし。

其スカンデナヴィア人が歐洲史上に表はるゝに至りしは、紀元前八世紀九世紀の頃より北歐に海賊國として活動するに始まり、前記トール及びオー

ジン諸神を信奉し、之を推し立て、歐羅巴の海上を横行す。之れ即ちオー
 ジン即ち應神船なり。此に於て頭を轉じて極東日本人の海上の活動を見
 よ、吾には「八幡船」として支那朝鮮の沿岸を荒らせしこと、毫もスカンデナ
 ヤ人の夫れと異なることなし。而して彼はオーデン船たり、我は八幡船たり
 其名稱や、亦同一神の名を以つてす。又其年代を考ふるに、かのスカンデナ
 ビア人等の北歐に跳梁したるは八世紀九世紀に亘り、極東日本の南海に藤
 原純友等の跋扈したるは其れよりも大約五六十年の後にして、其年代の順
 序、決して連絡なきに非ず、又た東西其運動に連絡あるは、十分之を推知すべ
 きなり。

此くて前述極東と北歐との連絡は、又崇敬する所の神々の連絡を生せし
 めて其同一なるを明かにし、又た其神々の同一なることは、再び反射して余
 の人種的同一論の證明を堅むるものとなるなり。

(十五)餘論

十五 餘論

音 語 の 比 較

「宇和」語原

宇和島の人種

附近の地名

板島、鶴島、宇和島——其名稱の前後は之を明かにせずと雖、板島はミシヤの
 トロイ的名稱なり、鶴島はホエニシヤのツル島の寫なり、宇和島は羅典語「葡萄
 及び酒を意味せる *Uva*」或は同意義の希臘語 *Uva* の「ウワ」の發音を取りしもの
 なる可く、何れも酒神關係の名にして、其名稱起原の神名はウワツ (*Uva*) 彦即
 ち宇和津彦なる如し。是れ明かに大國主の神にして、此こに埃及人種の關
 係あるを知るなり。(印度セイロン島の南部にもウワ郡 (*Uva Province*) あり。

此くて宇和島の人種關係に於ては、ミシヤ人種、キムメリ人種、ホエニシヤ
 人種、埃及人種等あるを知る。又た日本唯一なりとの稱ある鬮牛の戲ある
 は、若し之を西班牙の鬮牛に關係を附くるを得べくんば、又た其方面の人種
 とも縁なきに非る如し。

又た宇和島の四周の地名には、奈良あり、吉野あり、河内あり、三間(三輪と同
 一ならん)あり。又聊か離れたる海上には、「デンドコ」人活動の範圍たりし英
 國のアイerlandの古代名稱ヒベルニヤ (*Hibernia*) に對する日振島あり、若
 し夫れ新研究の着眼を以つて宇和島を研究するに於ては、日本は勿論世界

太古史及び人種播布の研究上多大の光明を投すべきもの甚だ多かるべきを信ず。

尚ほ因みに記し置くは—本章中數々言ひし所のキムメリ人種はヤヘテ (Tahiti 八幡) 人種に屬し、素よりアリアン人種なり。又たヤワン (Yavan) 倭専ら希臘人も同族なることゝ爲す。されば賢明博學なる帝國大學の諸教授先生の内には自ら朝鮮人の子孫を名乗り、滿洲の山出し人種の分枝なるを謂ひ、南洋土人の後裔を説く人ありて、強て日本人を以つて劣等人種中に分類せんとするありと雖、余は少なくとも宇和島人はアリアン人たり、ヤベテ人たり、キンメリ人たり、希臘、ホエニシヤ、埃及人たり、神話時代の神裔人種たるを證明せり。日本人全體に至ても亦必ずや優等人種なるは余は敢て之を主張し、帝國大學一派の日本人劣等人種主義は斷じて以つて世道人心の賊と爲す。此の如き劣等學説は撲滅せざる可からず—斷々乎として撲滅せざる可からず— DEI ENDA EST CARTHAGO!

アリアン人種

劣等人種論者

第九章 言語比較の結論

日本の希臘羅典系の語は輸入語に非ず
固有なり
最舊語

神話及び信仰の比較は彼我全然同一にして、又た只單に外來の傳播を受けて日本之を有せるに非ず、其信仰の固有的なるは吾人の神話比較之を示めせり。言語に至つても、亦其語原は希臘羅典的にして、これ亦傳播を受け、輸入せし言語に非ざるものなることは、細大上下の言語の全く希臘羅典系統にして、上は崇高なる神典の言語を始め、一般普通の文語常用語より下は卑近の俗語に至るまで、—名詞も動詞も形容詞も固有名詞も、盡く希臘羅典系のものにして、日本語全體の性質や、眞に日本民族固有の言語なるを示めすものと謂ふ可し。何となれば民族の言語なるものは然かく、外來語を盡く受け入れて、以つて外國語と成り得る性質のものに非ざればなり。

否な日本語の性質たるや、寧ろ史上の希臘羅典語よりも古代のものにして、或は末だ希臘羅典語等が、其れ々々分化せざる以前のものなるが如く思

語原學

はるゝなり。何となれば國語中の單語は、兩系統の夫れを包含して、之を有せるが故なり。

余は從來日本の比較言語學上、最も其短なりとすべき所の語原學に全力を注ぎ、此方面の關係を發見するに於ては、十二分の結果を得たるを信じ、殆ど凡ての日本語は、盡く西洋に於ける同胞語と同一語原に歸着せしめ得べきを信する者なり。

文法

語原已に同一なりとせば、次は文法の問題なりとす。然りと雖も余は元來希臘語羅典語等を知らざる者にして、其文法の如きも素より之に通せざる者なるは前已に言へる所なり。故に茲に文法の比較を行ひ得ずと雖、其僅小なる此方面の知識を以つてするも、尙ほ甚だ文法上彼我の關係あるを感ぜざるを得ざるなり。何となれば彼等の所謂「インフレクション」「デクレンション」等は、我國の言語に於ても、片々ながら之れを發見し得べきが如く、語尾の變化等は殆ど希臘羅典の其等と等しきものを多々發見するなり。殊に羅典語文法の如きは、甚だ多く日本文法に似たる所あるを感ず。

次段の研究にて可なり

長年月間の文法變化

單語と文法

余は此く語原に於て確實疑ふ可からざる關係あるを證明せし以上は、文法は次段の研究に譲るとも、亦専門の文法家の研究に譲るとも、余の發見の目的と結果とは大要之を得たる者なり。

要するに日本語は、世界文明國中の甚だ舊語にして、諸國語の分化前の言語なるが如きは、研究者の念頭に存すべきものなるを注意し置く者なり。

然り、日本民族は世界の最も古き民族たり。其言語亦世界の舊語にして、日本國家國民は連綿不斷、萬世不易なること、我皇室と同一なりと雖、年所を経ること長久なると、又其西洋方面より東洋に移動し來る山海遼遠なりしと、又種々の人民に接觸し又之を混合せしより、言語は當初の形態を失ひ、文法亦大に變化せしは、比較研究上、十分之を考慮中に置かざる可からず。何となれば、文法は變遷し易きものなればなり。

彼の希臘人と羅典人とは、人種其根を同うせるは世界一般の承認せる所なるにも係はらず、文法は全く之を異にして、只た其單語の同一に於て彼等の人種及び言語の同一を知り得るものゝ如し。之を思へば我日本民族の

從來の研究は語
原學を缺如す

文法が長年月と遠大なる地理隔絶及び其他の理由に由りて、文法を異にし來るは、少も異とするに足らざるなり。然りと雖若し尙ほ綿密の比較研究を行ふに於ては、必ず多大の同一點を發見し得べきは余の斷言を躊躇せざる所なり。

然るに從來の比較家等は其言語の本體たる語原及び語根の研究は全然之を度外視して、以て文法の異同を云々せんとす。是れ最も比較法の順序を誤れるものにして、其好結果を得ざるや當然なり。此點に於て、余は從來の比較言語學者を彈劾す。

茲に於て前に余を目するに狂者を以つてせし所の嫉妬と、負惜みなる動物は顔を赤くして彼等の城門より出で、人の尻馬に乗りつゝ、此く謂はん曰く『希臘羅典語は古くして、又た甚だ廣き言語なり、余等も亦甚だ多く日本語の其等と關係あるは之を知り居たり』と。果して然るか、果して然るか。彼等若し眞に之を知り居たらんには、何故之を天下に發表せざるぞ、何故之を自家専門の學科に應用せざるぞ。何等之を應用せず、以つて之を知り居

彼等の怠慢と虚
言

たりと言ふが如きは虚言のみ。彼等は夢にだも此等を知り居らざりしも、他人の功業に對する負け惜みとして此言を爲すのみ。彼等は國文國語或は言語學を専門と爲せるに係はらず、何等の報告も、何等の發議も此語原問題に關するものなきは、此問題に於て、彼等の全然無知無學なりしを示めすものなり。

若し又た眞に日本語と希臘羅典系との關係あるを知り居たらんには、彼等は自家の専門の職掌として(一)日本語は希臘羅典系なるか(二)若し然らずとせば其等は或は輸入語にはあらざるか(三)其等若し輸入語なりとせば幾何程度まで然るか(四)日本語原を研究し、字書等を改造するは急務にあらざるか―等の思想は彼等の専門の職掌上、當然起るべき筈なり。然るに毫も此事なきを見れば彼等は(一)専門職務に怠惰なるか、若夫れ然らずとせば(二)無知無學なるか兩者其一ならざるべからず。敢て彼等の猛省を促がす。

此くて前來記述せしが如く、文字の同一起原を有し、言語の此くまで多數の同一―或は尙ほ々々詮鑿するに於ては、殆ど日本語全部同一語原のもの

なるの感ありて、而も希臘羅典を同一語系、同一民族系に非ずとは余は思ふこと能はざるなり。

是れ言語のみに就て謂ふことなりと雖若し夫れ進みて、歴史的及び地理的に日本民族の研究を行ひ、國典の明文に據つて太古の日本民族が地中海岸より亞拉比亞海、印度洋岸に國し居りしことを明かにするに於ては、何人と雖余の日本民族希臘典系説の眞理を否定すること能はざるべし。

されば余は次に編を改めて日本太古の歴史地理を研究し、以つて尙ほ々々強固不拔の大磐石の基礎を吾人の所説に與ふべきなり。

他方面の議論

世界的研究 日本太古史第一卷終

225

4. 151

二

終

(大谷製本)

明治四十四年四月二十七日印 刷
 明治四十四年四月三十日發 行
 明治四十四年九月 再版發行
 大正 元年八月十五日三版發行

不計複製
 定價金貳圓

發行者兼 木村 鷹 太郎
 印刷者 水谷 景 長
 印刷所 博文館印刷所

東京府墨田區淺草橋町大字南水三〇九番地
 東京市小石川區久松町一〇八番地
 東京市小石川區久松町一〇八番地

東京日本橋區本町三丁目
 博文館

發賣元 博文館
 (振替貯金口座 東京二四〇番)



しれさ版出に國露
づ出記戦海の唯一

戦一此呼鳴

入挿圖戦海判大刷アイタロコ

日露戦争はあらゆる點に於て、最近世界に於けるレコード破りの巨壁にして、日本海の大戦は、此の最重要なる一齣なりとす。本書は、當時敵の司令官ロゼストウエンスキー提督の幕僚として、旗艦スワロフ號に乘組み、其の戦闘記録主任たりし。セメヨノフ中佐が、身數傷を蒙りて、自由を失するに至るまで、親しく手記せしものに係り。虎龍の兩艦隊が、國運を賭せる空前の大激戦の壯烈、凄惨なる状況を、詳記して餘蘊なし。著者は公平なる戦記家の第一人として、該國人中に盛名隆々たる人。其の序文の一節に曰く、予は記憶なるものに信を置かず。されば此の書は些事の末に至るまで、總て精確なる記録によりたるものにして此の點に關しては、予は、敢て全幅の責任を辭せず。其精細なる描寫、犀利なる觀察、加ふるに行文の流暢實に一讀、躬其境にあるの思あらしむ。宜なり、原書出版後、英、佛、獨、伊、瑞西其他各國語に翻譯され、到る所好評噴々たるを蓋我が此一戦と共に、海戦記、否戦争記中の白眉たるものならん乎。曠古の大戦役を記念すべく、敢て滿天下の人士に此書を薦む。

露國海軍中佐
前陸軍通譯

ウラジミル、セメヨノフ著
山口 虎雄君譯

全一册
洋裝判美本

正價金五拾八錢
郵税金八錢

博文館發行

士博學文 士博學法

著君雄長賀有

史歷本日大

博士筆を神代の太古に起して皇統連綿の國體を祖述し征露戦役の結了に至つて擱筆す其間事實の排列順序より日本社會の文明進歩に於ける原因結果の次第を懇示し努めて新説奇論を避け成るべく正史傳來の事實を紹述し處々に博士卓越の識見を加へらる例へば太化以前の血族社會の編制は博士が社會學の原則に依り特別研究を以て立てられたる見解多く又中古戰國の狀態は憂ふべきに似たれ共其結果として地方到處に文化の中心を生し所謂城下町なるものは今日の地方文明の起原なり是れ封建の餘澤なりとする説も博士の始めて本史に唱導せし所にして今日は通論となれり此他博士の創見に懸れる高論少なしとせず是れ本史が史界唯一の寶典として社會に潤歩する所以なり殊に博士の謙讓なる更に本史の正確を得る爲め閱る國學の諸大家に請ふて根柢的の修訂を加へられたるを以て錦上更に花を添ふるの完全を得たり故に世上幾多の國史ありと雖も之を本史に對すれば其優劣月鑑も管ならずと謂ふも決して誣妄にあらざるなり。

正價

上卷 金貳圓
下卷 金貳圓五拾錢

小包料各拾六錢

全二册

洋裝判脊革
紙函入美本

博文館發行

文 學 士
東 海 林 辰 三 郎 著

名 將 逸 話
時 代 的 武 士

本書は國民の讀物として編述せられたる者にて著者は上古より維新に至る我國武士の變遷を説き各時代に於ける武士の特質を叙述し更に其代表的武士百四十名を選んで其言行逸話を記したれば一面武士の變遷史たると同時に一面勇士の言行録たり而して著者は各時代武士の特質を闡明するに之れが理論よりも寧ろ其例話に重きを置き力を専ら逸話の蒐集に注ぎ流麗の筆を以て名將勇士の半面を描き來る所實に一篇の活小説にして彼の無味蠟を嚼むが如き一般傳記類と大に其選を異にす春の朝夏の夕之れを以て消閑の侶とせば古英雄と親しく相語るの感あらん敢て江湖の一粟を俟つ。

正價金壹圓拾錢

小包料金八錢

全 一 冊

洋裝菊判
南京綴美本

博 文 館 發 行

報 知 新 聞 記 者
田 中 萬 逸 君 編

賜 天 覽
死 生 の 境

附 錄 伊 藤 公 訪 問 記 勝 海 舟 伯 手 記 新 稿 記

革命には劍あり火あり血あり維新の鴻業は亦此三者に由つて彩らる本書は此大舞臺に活躍せし明治の功臣諸公が壯時死生の巷を馳驅し而かも克く身命を完うして報公の誠を盡せるの狀を自説せるもの也閃々たる劍光般々たる銃火を點綴せる生ける歴史は隠れたる無量の好史料を包藏して完全なる明治歴史の編著に資し全卷に充てる情義純忠の英氣は淫逸なる時代精神を釐革し各自見解を異にせる諸公が死生の解釋は一種の哲理を含みて世道人心を裨益する事頗る甚大即ち本書は實益興趣双絶せる好箇の教訓書たるべく更に史外の史傳を詳叙せる曠古の史書たると共に世に得易からざる自叙傳とも言ふを得べし。

正 價

前編 金七拾五錢
後編 金九拾五錢

郵 稅 各 拾 錢

全 二 冊

洋裝四六判
特製美本

博 文 館 發 行

師講學大國帝都京
著君象義邊池

史制法本日

法制思想無き國民は蠻民なり、我が文明の今日ある、素よりその根據無くんばあらず、日本法制史は一方日本國民法制思想の在る所を尋ね、一方各時代に成れる法文の要旨を掲げて其由來沿革を考證し、神代より起りて明治維新に至る大文字大著述なり、先生古代法制に精通し京都大學に教鞭を執る事數年、且才華優々たる靈筆を以てせられたれば考證的文字も輒く解意せらる、文明國として法治國として世の強大國と仰がる、我國民たる者は之を執りてその由來を知れよ、外國人たるものは之を執りてこの日本國民文明の本づく處を知れよ。

全一冊
洋裝菊判特製

正價金貳圓貳拾錢

小包料拾貳錢

發兌元

東京本町三丁目
振替口座二四〇番

博文館

エト5H

THE ANTIQUE HISTORY OF JAPAN

OR THE

JAPANESE AS A GRECO-LATINO-EGYPTIAN RACE

BY

T. KIMURA

AUTHOR OF—*The History of Oriental Ethics*; *The History of the Foundation of The Japanese Empire*; *Amazons, Ancient and Modern, East and West*; *Aesthetic Morals*; *Life of Lord Byron*; &c.

TRANSLATOR OF—*Dialogues of Plato*; *Memorabilia of Xenophon*; *Byron's 'Corsair'*; *Cain*; *Mazepa*; &c.

IN TWO VOLUMES

VOL. I.

HAKUBUN-KWAN

No. 8, Honchō 3 Chōme Tokyo, Japan.

TO THE READER.

The object of the present work is to establish the theory that our ancient stock was a branch of the Greco-Latin, which diffused itself in consequence of the Amphictyonic Council in Na'iri land, Asia Minor,—to wit, the land on the banks of Lake Van. It falls also within the scope of the present investigation to show that our ancestors inhabited Greece at first, then migrated into Egypt and Abyssinia, and after subjecting Persia, India and Siam, they came at last as far as our island. The best reference thereof is nothing but our own authentic history; the ancient part of which is not indeed the records of our island, Japan.

But, as the appellations of our provinces and towns were copied judiciously from those of different countries, east of Greece, one is apt to presuppose that the events in our ancient history took place in our present land.

As a result of my compalative study in myths and languages, it has dawned upon my mind that the Japanese people belong to the Greco-Latin race. My closer study in the Japanese classics, however, led me into the difficulty of identifying the historical geography with the present. I gave up my plan and started anew in identifying the Japanese classical geography with that of Greece and other countries. Those geographical names which are found in the Japanese classics but not in our present

land were thus clearly discerned in the Grecian and Egyptian maps, and many incongruous places and distances in our history are justified by the maps of Asia-Minor, Greece, and Egypt, etc. According to my latest investigation, the Japanese were the most ancient owners of land in Europe, and what Europeans call the Greek and Roman myths were mostly wrought out of our ancient historical materials—so the European history is indeed the offspring of ours.

The Japanese language is no doubt one of the oldest. Some of the dead languages and obsolete words in Europe are still in use here. Many names of places there, obscure in meaning, have much significance by the light of our language. Many of those manners and customs in the western world, whose origin is considered untraceable, are to be fully explained by referring them to those in Japan.

As to the geography of the Japanese classics, "the Bible" as they call it,—viz. the old stages upon which our ancestors played their part—I would say that our fatherland included Asia-Minor, Greece, and Egypt, they sallied forth on expedition, migration and communication toward the west, north and east. Westward—all the parts of Italy, the Cantal Province of France, the Alps, and Gallia—these names being clearly mentioned in our classics. Northward—the Black-sea, the Danube, Germany, Denmark and Sweden. Both the etymological meaning and the origin of the said names of countries and places are fully explained by the help of our mother-tongue.

To be sure, we are the "Javan" (=Iamano) in the Old Testament. We call our land "Iamato," the equivalent of the Greek "Iamatos." The present appellation "Japan" is not to be attributed to Marco Polo, as the present historians would have it, but should be traced rather to the Old Testament.

The Geography of Egypt also serves as a key to our classics. The names of Egyptian kings are found among the ancient families of our princes. Some accounts regarding the pyramid and the settlement of Jews in our Egypt-Japan are also given in the same classics. The most prominent idea constituting Judaism—viz. the idea of the peace of all the world over—and the beautiful bible tales—they all owe their origin to our ancestors.

My method consists in studying our mother tongue, classical and modern, in the light of the Greek, Latin, and other Aryan languages, and then reflecting the light thus gained to the Western world. While our language is consequently not to be fully studied without Western languages, the things Western, especially the oldest ones, are not to be sufficiently explained without the Japanese language. The Japanese is the language of the greatest value in the historical research of the whole world.

India, also, seems to have been a settlement of our ancestors, and the old Indian race a mere branch of the Egypt-Japanese. The Japanese language is also necessary in the study of Chinese language, history and geography.

Such is the relation of the Japanese to the races of the world. I am firmly convinced therein, and I hoep

my present work will be contributive to the idea of brotherhood and the peace of the world.

The first volume of the present work consists in the comparative study of the Eastern and Western myths and philology, and naturally constitutes the foundation of the theory of the Japanese as a Greco-Latin race.

The second and third are to testify that the Japanese migrated into Greece and Egypt, setting out from Asia-Minor, and extended their perigrinations to Southern and Northern Europe, while the Eastern countries—Persia, India, and Siam—would point to having been Japanese territories.

The said test is to be made by the light of the Japanese classics which have hitherto been unaccountably overlooked by the sluggish historians here in Japan.

On the completion of these three volumes, I hope I shall have the opportunity of publishing the English translation thereof; this merely being a kind of report touching only on their contents and arrangement.

T. KIMURA.

Tokyo, Feb. 20th, 1911.

CONTENTS.

INTRODUCTION	1
--------------------	---

PART I.

COMPARISON OF MYTHS.

CHAPTER I.

COSMOGONY	11
I. Of the Comparison of Myths.	
II. Gods of "Takamanohara" (Heaven).	
III. Cosmogony of Orpheus.	
IV. Cosmogony of Hesiod.	
V. Oomparison of the names of Japanese and Grecian Gods.	

CHAPTER II.

THE "ONOKORO ISLAND"	29
I. The Japanese Mythical island of Omphalos.	
II. The floating island of Poseidon.	
III. The Omphalos stone of Apollo.	
IV. The Greek etymology of "Onokoro."	
V. Other Greek words found in the same myth.	

CHAPTER III.

KAKUTUTI THE FIRE-GOD.....	42
I. The birth of Kakututi.	

【 2 】

- II. Etymology of Kakututi—"Cacus."
- III. The red cattle of Cacus, and the idea of fire.
- IV. The sword of "Oari" and the myth of Oarion.
- V. Kakututi of Japanese and Cacus of Greeks.
- VI. Blood of Uranos.

CHAPTER IV.

GOD IZANAGI'S TRIP TO HADES	62
I. Izanagi's (Zan-neanikos) trip to Hades.	
II. Orpheus' trip to Hades.	
III. Pomegranates eaten by Proserpina in Hades.	
IV. Odysseus returning from Hades.	
V. "Yomotu-sikome" and Eumenides.	
VI. Apples of Atalanta.	

CHAPTER V.

GOD IZANAGI'S LUSTRATION	80
I. God Izanagi's lustration.	
II. Lustration of the Greeks and Romans.—Apollo's journey for lustration.	

CHAPTER VI.

BIRTH OF GODDESS AMATERASU—THE GOVERNING OF THE WORLD BY THREE DEITIES	88
I. The Birth of the three greatest deities.	
II. Sun and moon myth, and eyes (omma) in Greek	
III. The Birth of Goddess Athena.	
IV. The Goddess Aphrodite.	

【 3 】

- V. A Grecian myth Concerning the division of the world among three Gods.
- VI. Japanese and Grecian myths concerning the division of the world.
- VII. Greek etymology of "Moirani."
- VIII. God "Kratana," and Ægis of Athena.
- IX. The neck-laces of Goddess Amaterasu and Athena.

CHAPTER VII.

GODDESS AMATERASU, THE TUTELAR DEITY OF JAPAN...	106
I. The valor and defence of the Goddess, and her protection of the State.	
II. The contest between Athena and Poseidon.	
III. The defence of Athena.	
IV. The identity of both Goddess.	
V. "O-takebi" and "Korobi" uttered by the Goddess Amaterasu, is the Dactyle and Corybas of Greek etymology.	

CHAPTER VIII.

SONS AND DAUGHTERS OF THE GODDESS AMATERASU ...	117
I. They are all martial Gods and Goddess.	
II. Meaning of the names of these Gods and Goddesses.	
III. The Epithets of the Goddess Athena.	
IV. The Goddess Amaterasu in Gen's invasion of Japan, and the Goddess Athena in the Persian invasion of Greece.	

【 4 】

CHAPTER IX.

THE HIDING OF THE SUN-GODDESS AMATERASU IN THE
ROCK-HOUSE OF HEAVEN 136

I. Violence done by her brother Susanō-nomikoto, and
his exile—The weaving, husbandry, and horse-feeding
of the Goddess Amaterasu.

II. Violence done by Apollo, and his exile.

III. Athena and the weaver Arachne.

CHAPTER X.

THE KILLING OF THE EIGHT HEADED DRAGON BY SUSANŌ-
NOMIKOTO 151

I. The Eight headed dragon and Princess Inada (Ina-
chidae).

II. Hercules' nine headed hydra.

III. Myth of Perseus.

IV. Princess Inada and Andromeda.

V. "Kusanagi (Xenageo) sword" and the "harpe" of
Perseus.

VI. The Metamorphosis of the hair of Susanō-nomikoto
and of Atlas into trees.

VII. Persian and Phoenician elements in the myth of
Susanō-nomikoto.

VIII. The word "Gorgon" of Perseus is known to us by the
word "Gangō" or "Gogamō."

CHAPTER IX.

OKUNINUSI (GOD OF OIKONOMOS)..... 186

【 5 】

I. Making of Idumo (Edom).

II. Myth of the Golden Fleece.

III. Hair of Samson.

IV. Healing art of Asclepius.

V. The rat of Ōkuninusi and Asclepius.

VI. Princes Inada and Medea.

CHAPTER XII.

SUKUNA-HIKONA THE WINE GOD 221

I. The Coming of Sukuna-hikona (Schoenus).

II. Different statements in 'Kojiki' and 'Nihonshoki.'

III. Author's prayer to the god of "Sohoto" (Sophos).

IV. Birth of Dionysus.

V. Princess Iamato-totohi-momoso-hime and goddess Semele.

VI. "Ramus" boat of Dionysus.

VII. "Kagami-boat," and the Cantharus-boat of Naxus.

VIII. "Iwakusu-boat" and Iacchus-boat.

IX. Fur of "himusi"—nebris of Bacchus.

X. Quack and Sohoto (Sophos).

CHAPTER XIII.

TOYO-ASIHARA-NO-MIZUHO-NO-KUNI (COUNTRY OF MUSE:
THAT IS EGYPT) 259

I. Abdication of Ōkuninusi.

II. Comparison to the myth of Jason's adventure for the
Golden Fleece.

III. Amor and Psyche.

VI. Myth of Io and Argos.

V. Myth of the swan (Apollo).

- VI. Divine nature of the deity "Takagi."
- VII. The meaning of "usihaku" (usus-fructus).
- VIII. Etymology of "amanosakate" ("anemosketes" of Greek word).

CHAPTER XIV.

THE GOD "ŌKUNINUSI" IS THE JUDAEAN JOSEPH 287

- I. Proof from the Old Testament.
- II. The phrase "Iakumo-tatu Idumo" means Jacob and Edom.
- III. Joseph and Benjamin elements in the life of Okuninusi in the Japanese classics.
- IV. Samson and David's elements.
- V. The Bow and sword of Susanō-nomikoto, and those of Jacob.
- VI. Ōkuninusi the God of happiness—Joseph the man of happiness.
- VII. Both Ōkuninusi and Joseph are the "usus-cognitam."
- VIII. Two sons of Ōkuninusi and of Joseph—the same.
- IX. The treatment given to Ōkuninusi and to Joseph by the king—the same.
- X. The temple of the God Takeminakata (Meaning Sal-moneus) is the temple of Jerusalem.
- XI. God Kotosiro-nusi (Kata-syro [Gr]), Apollo and Moses—the same.
- XII. Seeds of Christianity are in the teaching of Ōkuninusi in Japanese Classics.

CHAPTER XV.

MIRACLES IN JAPANESE CLASSICS AND THOSE WROUGHT BY MOSES. 334

- I. Miracles wrought by the God Takemikatuti, and those of Moses—the same.
- II. The sentence of 'The Sea-weeds-cutting' ('Mekari') in Japanese song book, and that of the crossing of Red Sea of Exodus—the same.

CHAPTER XVI.

COSMOPOLITIC VALUE OF THE JAPANESE DIVINE BOOK 'NOTTO'—AND ITS JUDEAN RELATIONS..... 342

- I. The First-rate book in the world is the Japanese 'Notto.'
- II. Supreme ideal—the peace of the world.
- III. The Japanese word "Iaso" or "Iasousi" is the same as "Jesus" (Iasous [Gr])—"Iamato," another name of Japan is the Greek word "Iamotos" (meaning healing and salvation—in the Old Testament "Javan").
- IV. The fountain-head of civilization of the world:—Eight deities honoured in Japanese Imperial Court are eight Muses of ancient Greeks.
- V. Great ideas in the Old Testament are the compilation from Japanese (ancient Egyptian) literatures.
- VI. The relative position of Judaeans to the Japanese.
- VII. Historical-geographic value of 'Notto':—Dominions of ancient world wide Japan.

CHAPTER XVII.

CHRISTIANITY IS THE METAMORPHOSIS OF THE TEACHING OF BACCHUS..... 374

- I. Christianity is the religion of compilation and extraction.
- II. The characters of Jesus and of Bacchus—the same.
- III. Teaching of both—the same.
- IV. Christianity is the metamorphosis of the teaching of Bacchus.
- V. Artistic representations of Bacchus and Jesus—the same.
- VI. The Good and beautiful parts of Christianity are the extracts from Plato.
- VII. The life, the teachings, and the death of Jesus are the imitations of Socrates and Plato.
- VIII. Christianity is the production of Grecian minds.

CHAPTER XVIII.

THE BEAUTIFUL AND FUNDAMENTAL TEACHINGS OF CHRISTIANITY ORIGINATED IN EGYPT-JAPAN..... 404

- I. The teaching of Christ about the lily and Solomon's glory, originated in the Susanō-house of Japan.
- II. The well of Samaria in the New Testament, and the trip of Hikohohodemi (Hippodamus) to the Sea-God's house—compared.
- III. The teaching of living water of Jesus is the modification of "The wonderful-well" in the Japanese song book.
- IV. The idea of the crucifixion of Jesus is the modification of "Akogi" (agony) tradition of Abyssinia-Japan, or Ixion myth.

CHAPTER XIX.

THE CONCLUSION OF MYTHS-COMPARISON..... 425

PART II.

COMPARISON OF WORDS.

CHAPTER I.

INTRODUCTION 431

- I. Weak points of Japanese philologists.
- II. The idleness and inabilities of philologists of Imperial university of Japan.
- III. They are destitute of patriotic ideas.
- IV. They are captivated by the imperfect western philology.
- V. Philologists' circle of Japan is defective because of inadequate knowledge of comparative etymology.

CHAPTER II.

LETTERS OF MYTHICAL AGE—AND THE ORIGIN OF THE JAPANESE ALPHABET "KATAGANA" 442

- I. Letters of mythical age.
- II. Three kinds of original letters.
- III. Origin of "Katagana" (Kata-graph).
- IV. The Making of "Katagana."
- V. The table of the development of "Katagana."
- VI. Many of Chinese letters are made of "Katagana."

【 10 】

- VII. Moabite stone and Japanese "Katagana."
- VIII. An advice to the reformers of Japanese letters (Rōma-ji party).

CHAPTER III.

RULES OF CHANGES IN PRONUNCIATION AND CORRUPTION OF WORDS..... 470

- I. Introduction.
- II. Value of the table of 50 letter of "Katagana."
- III. General views of the changes and corruption of words.

CHAPTER IV.

TABLE OF COMPARATIVE ETYMOLOGY 505

CHAPTER V.

EXAMPLES AND EXPLANATIONS OF THE COMPARISON OF WORDS (I). 549

CHAPTER VI.

EXAMPLES AND EXPLANATIONS OF THE COMPARISON OF WORDS (II)..... 605

CHAPTER VII.

COMPARISON OF THE TASTES, MANNERS AND CUSTOMS OF THE ANCIENT GREEKS AND JAPANESE 651

CHAPTER VIII.

UNIQUE MATERIALS FOR RESEARCH•PROPOSED FROM UVA-JIMA, THE AUTHOR'S NATIVE PLACE 667

【 11 】

- I. The reasons of the proposition of Uva-jima.
- II. Peculiar words of Uva-jima.
- III. "Buu-iale" (βού-ελαω)—Uva-jima festival (I.)
- IV. "Euiasa" and "Euhoe" (εὐασα, εὐοε)—Uva-jima festival (II.)
- V. "Dendeko" (Dendro-kome [G], Langifer-Tarandus [L])—Uva-jima festival (III.)
- VI. The Dendeko song and the myth of Jason's Golden Fleece.
- VII. Bosphorus straits in the Dendeko song.
- VIII. Black Sea in the Dendeko song.
- IX. The Danube and Sweden in the Dendeko song:—Cimmerian myth.
- X. Denmark and Germany in the Dendeko song.
- XI. The Dance of Dendeko and the dance of Europe:—Caledonian and German quadrille.
- XII. The relation of Uva-jima to Troy and Tyre:—the Mysians.
- XIII. God Valē (Valeo [L]) of Uva-jima is Heracles or Merkart.
- XIV. Ancient Japanese Emperors and Empress Thōra, Jingō and Odin—and the Scandinavian Gods and Goddess Thor, Jingo and Odin—the same.
- XV. Conclusion.

CHAPTER IX.

CONCLUSION OF THE COMPARISON OF WORDS 746

[14]

The following is a list of the names of the persons who have been elected to the office of Justice of the Peace for the year 1900. The names are given in alphabetical order of their surnames.

1. J. A. [Name]

2. J. B. [Name]

3. J. C. [Name]

4. J. D. [Name]

5. J. E. [Name]

6. J. F. [Name]

7. J. G. [Name]

8. J. H. [Name]

9. J. I. [Name]

10. J. K. [Name]

11. J. L. [Name]

12. J. M. [Name]

13. J. N. [Name]

14. J. O. [Name]

15. J. P. [Name]

16. J. Q. [Name]

17. J. R. [Name]

18. J. S. [Name]

19. J. T. [Name]

20. J. U. [Name]

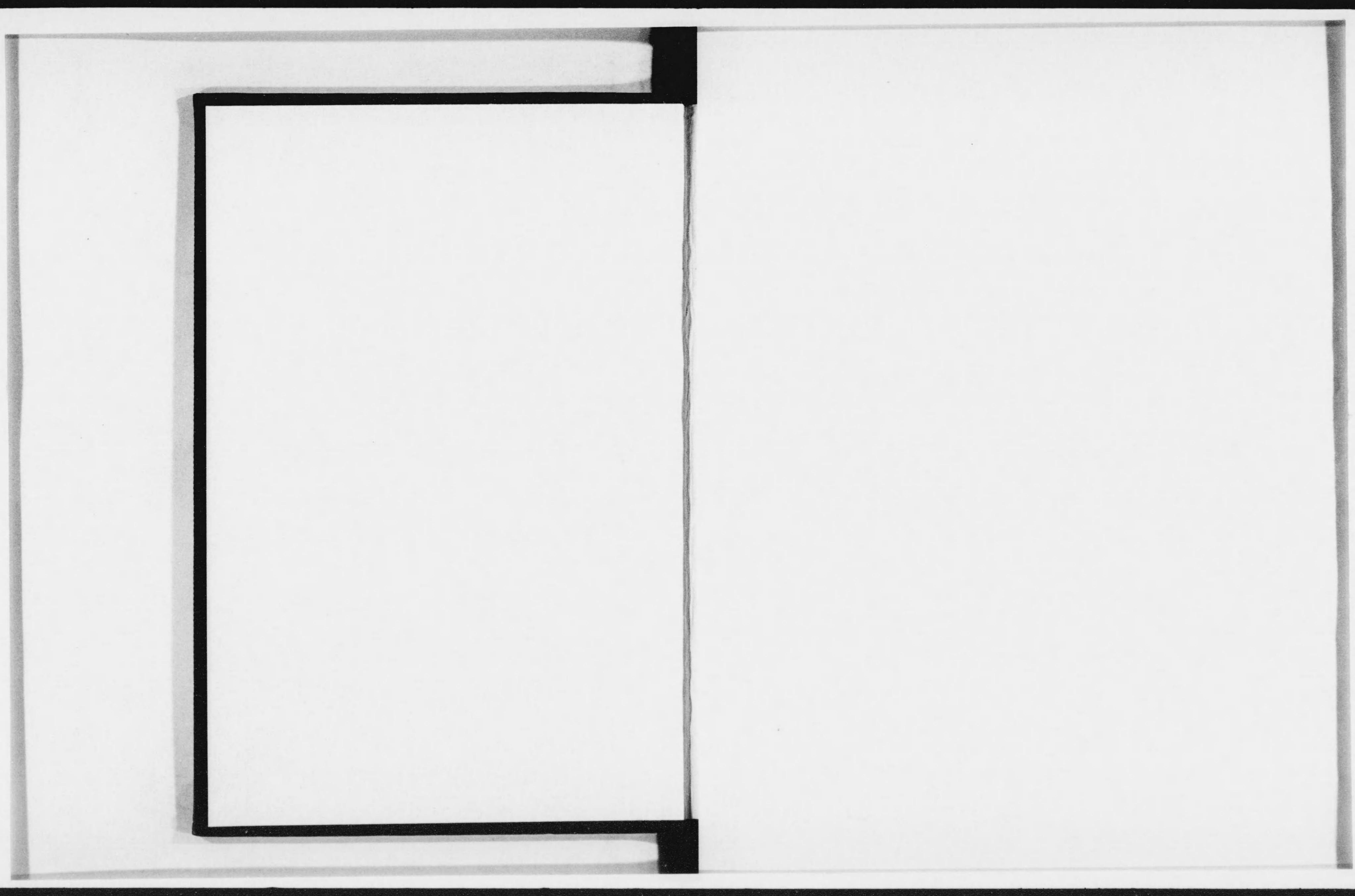
21. J. V. [Name]

22. J. W. [Name]

23. J. X. [Name]

24. J. Y. [Name]

25. J. Z. [Name]



終